



みなみ ゆきお コーチ
南 由起夫

コーチが語る！ソフトボール部の軌跡

コーチに就任したのは、今から14年前です。それまでのソフトボール部は、大阪大会での1回戦敗退が続いていました。大阪大会、近畿大会を勝ち抜いて初めて、全国大会の切符が得られます。簡単なことではありません。就任してからは、練習内容を一新し、基本に忠実に、特に守備の練習を重点的に行っています。

今では9度の全国大会出場、うち2度の優勝を誇る良いチームへと成長しました。

「岸城なら勝つて当たり前」と、周りからのプレッシャーも大きいです。これも部として結果を残し続けてきたから。

岸城中学校ソフトボール部史上初となる、全国大会2連覇への道は、すでに始まっています。



ひとが咲く

岸城中学校 ソフトボール部

今回の「ひとが咲く」は、岸城中学校のソフトボール部の皆さん。今年開催された第39回全国中学校ソフトボール大会（女子）で、優勝を収めた彼女たちに迫りました！

穴あきグラブ



一般的なグラブ



ユニークな練習の数々！

～個々の能力を引き出すオリジナル練習法～

岸城中学校ソフトボール部には、実にユニークで、独特な練習が多くあります。その独自性が注目され、練習法がDVD化されるほど。ノック練習1つをとってみても、ポジションにこだわらず、1塁から本塁まで全ての守備位置で、部員が練習をしています。

また、普段からウェブと呼ばれるグラブの親指と人差し指の間にあ

る部分を取り外した、「穴あきグラブ」を使用し、キャッチボールなどを行っています。これは、しっかりとグラブの芯で捕球出来るようにと取り入れているものです。

このようなユニークな練習を行うことで、部員それぞれが持つ能力を最大限に引き出し、個々に合ったポジションや打順を決めています。

得ることが出来た勝利でした。

南コーチも試合中、1球、1プレーに自分の全力を出せたのかを部員に問います。たったの1球。その1球に泣き、その1球に笑う者がいる。目の前の1球を、決して諦めることなく追い続けてきた結果が、全国大会での優勝でした。

「心鍛えて唯一球」 全ての思いをその一球に

チームの合言葉は、「心鍛えて唯一球」どんなに苦しい状況でも、前を向く心を。そして、目の前にある1球に全てを懸ける。

全国大会の準々決勝では、リードを許した展開で、最終回の2アウトからサヨナラ勝ちを収めています。合言葉を胸に、どんなに苦しい時でもお互いに声を掛け合って、みんなで最後まで戦ったから



ソフトボールだけ 出来ればいい訳じゃない！

ソフトボールだけでなく、勉強や学校生活なども、きちんと取り組むことが部の方針です。それが出来ないことが理由で、試合や練習に参加出来ないこともあります。

いくらソフトボールが上手く出来るからといって、勉強を疎かにしていい訳ではありません。勉強や普段の学校生活があつてこそその部活動です。「勉強とソフトボール、どっちも出来る方がカッコいい。」と

南コーチは言います。

また、部活動を通じて学ぶことは、何もソフトボールの技術だけではなく、皆さんの人がサポートしてくれる、今のこの環境が、決して当たり前ではないこと。一緒に泣いて一緒に笑い合える、かけがえのない仲間の大切さ。技術の向上だけでなく、ソフトボールを通じて学べる大切なことがそこにはあります。



取材を終えて

全員がソフトボールに直向きで、何より笑顔でプレーしているのが、とても印象的でした。

頑張ったからといって、目標に手が届くとは限りません。しかし、そこに多くの人の支えがあれば、その頑張りが実を結ぶのだと感じました。

また2020年の東京五輪から、ソフトボールが3大会ぶりに競技として復活します。すでに、16歳以下の日本代表チームに選ばれている部員もあり、将来の活躍が楽しみです。

皆を支える大きな味方

「親」の目から見た部活動

子どもたちを見ていると、今までサポートしてくれた人たちへ、「全国大会優勝」という形で恩返ししたいという気持ちが、大きかったように思います。それに向かって一生懸命に頑張る子どもたちのために、親として出来ることをただけです。

また、家庭でソフトボールの話をするのは、あまりありません。そういう意味では、気持ちの切り替えが上手く出来ていたのではないかと思います。

全国大会では厳しい局面でも、みんなが笑顔でプレーしていたので、どこか安心して見ていられた。練習に行きたくない、ソフトボールを辞めたい。そんな苦しいときも、ずっとそばで見えてきたからこそ、今回の全国大会での優勝は、親としても一生に残る思い出になりました。